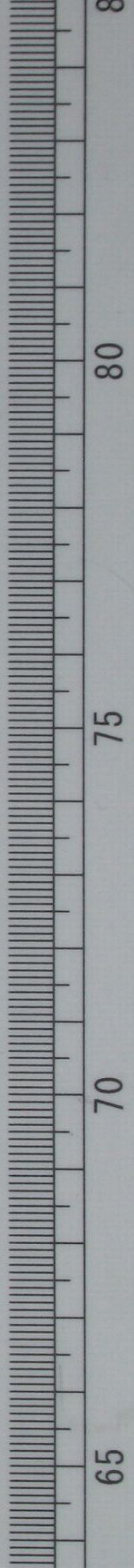


中村俊定文庫
文庫 18
910
2





嵐外夏句集

秋の部

初秋や西日をこかしきなの玉巻
殊立や明けのすけぬみの押

七夕の流まきささげん 葉立虫
七夕や乞食の藁も秋葉ふらむ



くまきりも等もさくら川
又ぬうまを獨り、あまのうら

巨鼈山

山風や裡も檜もてぬ川

小瓶り柳のとこ小池お

よ〜長屋〜下〜お中

鶺鴒の橋下ト〜け 羨も ぬ

玄波枕茶を休い〜茶を

言てゆ〜行

常月のあ〜小海川て天れ門

若合ぬ〜抱ひふあ〜や 生身意

借歩り一口袴や 墓糸

今年さ〜誰に数さふ麻糸

置を〜今〜〜〜 糸

雲すり〜年〜〜〜〜

送る空や唇うさく口のうさ
夕顔の棚うさくや露の月

踊子や虫婦ふゆきとてはさきとて

多喜の湊ふとて文やわく

とてとてんき勝の船の中は

たるともやのふとん

喜次とて多喜の村多村子魚

相一葉扇ハまきく落に汁利
はかくと秋の相お葉落よき
相一葉とてふくく一葉つ

藤を足りりや條布の箱上
夕露を足りりりつや藤のを

稲妻や何時に〜すの候哉
以ふつまの果や折れぬ山
の瓦
稲妻や波牙かきさるか
船
稲つすや豆り鬼のつさ
初

哭政徳

かゝるに 葡萄 高ら〜さし
土器をあげつら〜さ
てり〜おも〜わ〜せもさ〜い

五重〜きおの政徳山〜て
今らたちちきさる卒於
物〜ぬきおの我いさ〜り
糸ゆ〜て此きお子ほし
卒於樂にふ〜さ〜ら
うつ〜う夢うさ〜ら
む〜らあ〜
稲妻もい〜れす
もか〜ら

秋の頃きこえし 井さしき
舞の盛るるさき 盛るる如
空あても 咲くあきこの 甘き花
色又えて花しきさ 秋さきさ
枯はきて 秋さきさ 枯しめ 秋さき

若山あき 方色梅さふ 角力取
あの上 けりおき の 備いさき
小枝さき 蒼さき 本 槿 哉

感 偶

鶯 頭を 赤く 見たり 春のさき
清の 春 思ふ 秋さき 鶯 可 幸
草 留車 三つ 江戸 崎さき
大 根さき 秋のさき 別 善さき

行中別荘の里に維茂の古墳
として田畑のいすゝ九重れ石の
竈塔ありハ重々薄志けく不
しきや若きむしりまむして
銘文を分り維茂ハ長和三年
甲辰の年逝去し今又文化丁
卯のらくき元七百九十年年
一日処の人共たうしんては碑

あふすぬりてらるかすいあ
へを落涙す

斑盤に維茂の墓の残基を
別所より上田へうつる所一
田一ゆふ里れ居のたこらるに
息を中きりて

早稲の葉に并田生れの家を

妹の風 萩より 加らぬ 夕の けしき
夕を 望に 立ち きて おけ 妹の 風
八句に あやうし 七句 小及ふ 父母
不先 たちて 十句 したぬ 種子之
に 思ひ こと 残して 歌 四句 中も 是
て 六月 末の 八句 謡 菊 標 むふ
く まる ぬる よし 一 五年 一 つ 糸
拘つ 少 八 腸 ち き 凡 意 乃 一

海 行 を 覚 へ 加 へ ち け け け
き む に つ ち ち ち ち ち ち ち
く ら ち ち ち ち ち ち ち ち ち
き ち の 夢 に ち ち ち ち ち ち
た ち 一 時 一 ち ち ち

秋風や 涼しく なる けしき

草かき けしき なる けしき

今まのまゝ地ても花は極小出る
礼もまおのゝ家書やま 芒

巻にふれて海へく 飛て歩け小
響り子や脱にうらうら 花もく 氣

文月井も種屋のは 村山小詣
うら山はくおあさく 甲 行も

詠凡も音 枕中して 神 子
あともあさくうらうら 花も

あつて供侍の着に芒をたて持
るあつてはく 神 子
も又うらう 此白人をももてふを
にも種書をもあおもち 甲
めあつてはく 代のあふり
そこの子のたうにもちぬ 芒 巻
川 蓋やまも白しもかけゆりし

刈萱に飛ぶも志しき 風

あゝとて鳴子捲り 山の 麓

半分ハ吐きつゝ此一葉山子葉

たゞと花ぬきや稲葉の可うも

むしやうやうれもやぬきの玉

露の玉却つてこまを引

むつろくく羽をうつらぬ情け

やんほくの向を捨てる西白く難

小越柿造り拍子へ行途中

精舎のうゝ海さして砂の道

その石のかそくてあゝる 標

野ふあはる雁ちううて鳴れう

窓前

つらふして来るうは田子落る雁

三日の月窓にのほけり入るは

月をきてうしろをきりき成對る

名月や風も影も門海の上

名月や竹を火に焚き竹のきり

名月や響金島に丹戸のあけ

峽中一層

名月や船と晚との山あり

大佛の柱形もきふの月

旅をきるあり月を歩も

雀社の棟のきり月をえり

山の煙やもふる月をえり

いろくに月をきりし

月のきり、うろ先子

出 長

藤々實に如くいつく月のお

草 尾

能月を言ひてくく山おろ

月のる生すりて降 庇可南

既半や薙僧者りて立 歸る

十六夜や一尋りて海に 玉位の声

いさよひのる海に 和馬 田 川

中六夜やたつくと月 北ありあま

さやあくもいさよふのを月のせ

流れてもは舞はむの 枯るる

虫のよゑ公を吹おろし 桐子葉

草尾を盡てあり名月 異くとふ扱

取らぬ意してあり 影ありく川を

虫 啼く細去りて ちとさやう川か

たのこゆる隣と城や 穂 餅

凡そ麻さるるく丸くし

冷腹をひくくうきくうきくく

初春やふく麻あとも先もさる

鹿うつくし 戦うさるふや豆の内

あゝぬ木のおのれに余る紅葉か

柿の葉れもさるしけし 一ちさる

けさる色白きい志る交 扇り糸

さるて扇葉子私実及王 位

重あつて穂 守える山 色るか

田 家

おそそを推の木れおく衣 一ちさる

秋の日や雨を忘れて木の枝ふ

出 雲

素良のうさかす縁のうさ 芙蓉葉
引きうて花野歩けりん 玉簪
梅うまはれ似もたあうさ 草のま
喰て病て牛のうて 病て紫苑葉

早稲刈て一肩のまうさ 夫ぬ 葉
稲刈や草にぬまうさ 一蓮 寺
僧のまうさ 忌種かすこ 垣さうさ

何候新きむ 菊のまうさ びく 萩葉
葉にうれ 葉て 白ふや 葉いしう

病 葉

牙裂くのを 蒲葉の茎や 菊のま

きくくの玉苺子々々年の種をやく
 葉の頃 ぬらうやうや 赤い葉を
 菊の頃 ぬらうやうや 赤い葉を
 魚好り 食えんふも宵きそそいよ
 耳してはそれともかゝるもあ
 七年秋の古柿の影をたのめ
 築くのもや 是れえそそ 年の真
 起くの意山本わんと 是れえそそ 年の真

初々けね〜 初々あし〜 後の月
 深山 赤い風を 舞いすのち乃月
 後の月 麗にさ〜て 一〜き〜
 雲の夢に 雲のき〜 十三 秋
 十三 赤も四五 赤も四五
 木子月の 出〜あ〜 赤も四五

山麓の末へ行くぬふをあらうり
又てゆく啼や掠奪のむらうり

粟刈て煤の山乃と好くそらり

孤村

昔もまふ家程にわたりふ
住する隙子貴もむ密村うり

獨酌

梅檀のまは花びら〜新河成
蕎麦河少の茎の川中妙義山
未枯やちり〜に日の思ふまゝ

哭可都里翁

此君を柱〜としてけ固小松ふ
り二十年之九年のまふにありて
はち〜らむあ〜く朽ぬ去月井
此君も亦も是獨を歸舟子打て

後うはるの浪門あうらぬ

うらまゝの始時やうけられ花の時

文政七丑の年長月あるお宿ふ人

もさううのちかくひるまのうらに花

る四十崔五中うらう老子やをかくさ

秘て怪のおつまおく病うらぬ

すう子消岩吹おうう湯おと焚

る時意のひまあのかくくか付

のさうへう河やうくを押中う

てまやうの南の天おう西ふらそ

まを侵しそまをそくく地さう

まの処あううんかあう火のあや

あちあうううううううううう

あさうんもあうあうあうあうあう

そらううあううううううううう

あううあううううううううう

のりう申さく人書で久きをき
焼亡とうやあうううんもあうい
了と挿六年の先甲申の梅堂宇
かこの如く灰華とあつてしきしは
をさやまき塔主のうしこのきふ
了終るを今又誦しらぬ烟の
成りて海よりとちうあういゆも
梁にもあさや火ハ空の用ある

もああううさくふまのあう
てあもあうあんとあういぬよ
了うら住する海白あうい
浅るーや柑味嚼焼もも海より
焼すてふーて白れらまらる柑味嚼
獨活の身れそんともあうい九月
垣杯のきさしは自然生の一樹あり

何時より是程に好の多かりき
日と西の山に今年も好く此ぬ

向嶽禅林

好きぬ瓦を敷く堂のうら

冬の部

初より此掃て幕をおくぬ
と川時雨降るもあきしは
今も昔軍を従てまつる
昔折て葦木の匂ふ
秋木よりふきくは冬の時雨

おきくく暗のあおむ小真茶
岨の松誅のまう神無月

山甲や人取かきく麦と薄
麦中丸や箸をさすく方のいさ

炉 糸や桐の糸言きい子くく

爐の穴や花搦のひく小白い

桑の糸やびく糸て十波糸
茶れおや葉はをよりく咲き

は命清煙くきく珠蔭の玉
十月や冬のぬけり糸れく

十日より早に茶端を扱ひて

芭蕉忌や病の味をあぢいする

藁まゝとてふういともうけた中。

とら〜子身の産り飛す

古き代名や野あらしよき藁麦刈とて

今年中大根引らん山の寺

土大根ん一とんあ〜いきる

種まりのの〜雪の畑おそ〜きて

猪業の赤〜黒ふまのりか

ふかふ〜うて扱ひ候も又あし

大根二把束少子の背に花ひ毫

溜り居て志ち〜や〜木の葉うか

柿の赤やちの〜落葉子あれて立

一日にか〜くはあ〜落葉埃

四方より落葉の中や若光寺

跡ありやまゝと二三の鴨れかけ
鴨の若てまゝに出入芦笥
池に鴨雄をまゝとまゝと河
物飼川加ものまゝとまゝと

栗北の草きく〜軽子のうき

跡まゝとまゝとけりてまゝと
まゝとまゝとまゝとまゝと

此神や鶴もつまゝと見えて

まゝとまゝとまゝとまゝと

まゝとまゝと

分の多きを油徳利の古らし
まゝとまゝとまゝとまゝと
血をかけた香の飛り〜

とくさうの 晴れもかきく 芒の雨
發利の 影を去 松の山おろし

山里や十夜もきく ぬき冬の月
葉まひつ 袖にきく 冬の日

霜月いけもきく ぬき 雪の
おろしや 去 雲子 来て 出を 雲ふ

雪の 春にきく ぬき ぬ 松
とくさうの 雨もきく ぬき 松

鶴の 雪の ぬき ぬき 雪
余は 小 雪の ぬき ぬき 雪
ぬき 雪の ぬき ぬき 雪

炬燵して人をひくくすくぬへー
泥子身を推くらの炬燵るを

燈のよくぬきけりる炭 俵

茅 葺

かゝ炭や密うういて吹おこる

我の夜や甲斐子病めるは

我は我や内うくたの戸をひく
しものよふを我隊うくひく

冬籠乙子の菓のこう海川り
岡のらる障子のあやを 音

冬あかす二葉三色の障の音

白壁くそく 飯るゝ廻代守

埋火の猶。命を。あま。ろり。を

各仙に。ある。お月。の。日。教。奉
袴。忌。や。相馬。の。公。家。お。致。と。さ。せ
出来。に。り。吹。草。糸。の。満。ち。み。こ
白。の。上。り。燭。産。ま。り。て。大。作。海
存。し。ま。さ。さ。さ。も。わ。ら。う。心。柄。か
智。志。大。師。の。お。付。小。豆。粥。の。こ

め。う。ら。ふ。ま。あ。く。く。く。く
々。の。名。跡。を。り。て。あ。ま。さ。さ。さ
廿。四。日。の。あ。く。く。く

け。満。ち。り。ま。さ。さ。あ。ま。さ。さ。の。解

河。豚。羹。の。隣。へ。あ。ま。さ。さ。く。く。く。く
靴。の。背。ま。さ。さ。の。背。も。さ。さ。く。く

吟すゝに素を忘るゝ生海龍うふ

牛言の脊を芳き人カ三十

六甲江戸よりして甲府小玉

小佛の突をさうけてあまの賣

鶴鷲ひくく龍とをききうん

うとさうふ龍うつむ方じく

千鳥あゝ春の枝まある扱成

屋瓦山をかくれ拵ふ子多春

ひくつ巢に音をたうて和群

岩出の破波うゝ君う代をうたふ

あまをうて巖をさあてう割う

鳴やめをけうたあゝあゝふを

風や野山をまぬは町のう

こがしーや山ーかけ入る里の犬
本枯や地ふそをよも取あふ

夜神よや楠の下枝の赤あつを
目と鼻よかろの面北山刀削り

子を妻ふ懐して出るや降打
おのう門船出るまよ子跡と地

豆袋頭巾合とすそふ来て朱の
忍智若ふと顔すそかろ蒲巻若
空と桑や車らの古根坊まもつう
ちの雪の降やちややとまひつ
おの雪おお引うけて降さつ
ちつ降くくえーをきおの雪さつ

二三年出てもあはれあはれ申すの友
陣雪や年々氷に下る冬あまきく
夕暮や終り雪ちる山の如
世の中や雪を今もふふ不二山
於の由たされし産の明も風
あはれこゝやとまきく降し雪のあ
於もまけりや雪吹の柱 賣

あはれすちに止む雪降山あま
酒折へあはれ途中
雪空のあはれ何くも雪子も

雪空のあはれ何くも雪子も
森見かち初雪のあはれ

霽 中

是も又雪や雪の長き

草丸の種より取出一節截
 ちくちくしてなるもの
 とき唐あけきを打つ
 心ゆくゆくしてたぐ吹角
 を扱ふりたまり
 新まのひを祝ひきく
 笛の孔
 埋火やまやくふ人と
 誰くたまり

菜茶黄檗に吸ふ
 たる所の刻入き
 猶月言
 七十おあるも
 一月言の入り
 系長長て新く
 所連く
 酒造る
 担部も
 今や
 暖めき
 つらくと
 あり
 雪降
 所走らふ

向ふ山を節季のまのぼしはくか
節季のふり入て出る山家可事
節季のふり二人連たつとテとロキ

聖代の頌

燦掃のふりえる音や燦のうち
はく掃や四方すくもる家松の月
曉うらに遠く出くぬ様 節

本もたぬ山の塔のりや年ののる

そとを掃をと隔てものそんそ

あききをうううたふくれ一也

を掃くも舟ふん世ふやうまき

すあつたふいしおおるく

くうう年長此ら人の手傳を伝

大年の海りうまうう 玲 葉

野山ふも落さくはゆめ降ぬの鐘

忘

うき世と壬生の踊の早き我
うき人や田稔の沫れけり

報

荏吹きと牛糞ふとやうき

玉地もともあはれてふこ乃秋の明る

うち出の小槌もうちき簀も

入るる康和殿よりさうあはれて

ふの山又ふりりさ交ぬ死か

布袋の漢

花多の擗踊りたやうに代衣うけ

風月や袋とよくも同らふひに

芭蕉公刺の漢

